



第2回運営指導委員会に合わせて、校内研修会を10月26日(金)に実施しました。

今回は、運営指導委員会で委員の先生方からいただいたご意見の要旨と、森委員長が校内研修でお話されたことの要旨をそれぞれお伝えします。

### 【運営指導委員会等のご意見要旨】

#### ○御園運営指導委員より

実際アクティブ・ラーニング(AL)といってもどうしていいかわからず不安な先生もいると思う。すべての授業で100%アクティブ・ラーニングでなくても良い。先生同士相談したり情報交換したりすることが大事である。

なお、授業評価アンケートは、さらなる改善をされると良い。協力もできると思う。

#### ○猫田運営指導委員より

アクティブ・ラーニングの核となる概念は、生徒が教室でないとできないことである。学生を見て思うことは、ディフェンスができないことである。自分の意見をつくることはできるが、反論ができない。授業で、生徒や教師の意見に反論させるような活動を入れていくと良いと思う。意見をまとめるだけでなく、次の段階の力も育んでもらいたい。

良い取り組みをした教員にアメとしてではないがインセンティブを与える考え方もある。アクティブ・ラーニングの達成目標の共有より、ツールの共有が浸透しやすい。例えば、教材の共有など。例えば、R80、授業の最後のリフレクションを80字で書かせるシートを学校で統一化してみると良いと考える。島根大学教育学部附属中学校では、数学の授業の単元毎にレポートを課しており、効果を上げている。

#### ○森運営指導委員長より

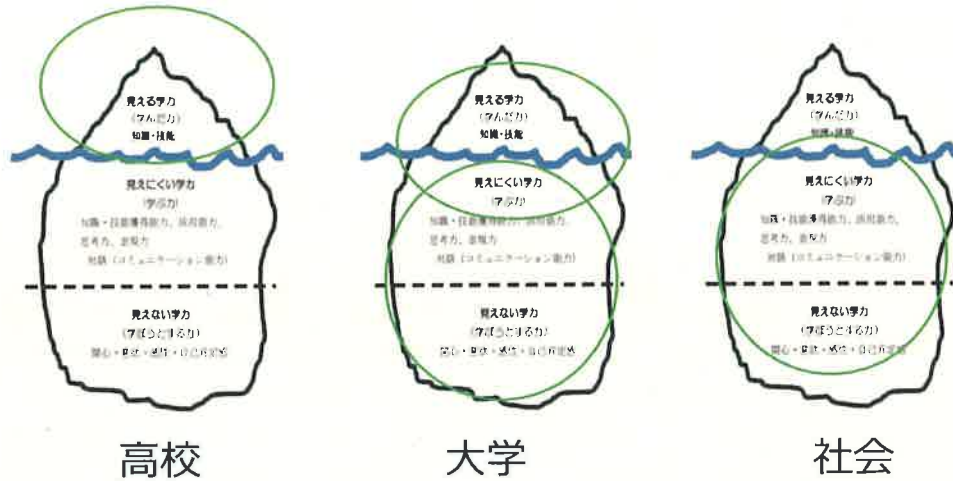
授業を通してメタ認知できると良い。授業評価アンケートのデータを見ながら話をするとう有効である。現状を知って改善していくことがカリキュラム・マネジメントの観点からも大事である。学習評価を変えているとうかがった。学習評価を変えることで授業改善を図っていくことは先進的である。学習評価を松竹梅の段階に分類すれば、学習に主体的に取り組むようになったかなど、資質の向上のみを評価するのが竹の段階である。最終的には、松の段階、生徒の理解の部分はどう評価するかまで目指してもらいたい。別の言い方をすれば、自分が何ができるようになったか知ることができる評価にってもらいたい。授業評価は到達度調査と行動評価に分けると良いと考える。

### 【森先生の校内研修の説明要旨】

最近、IRが注目されている。IR (Institutional Research) とは、教育研究や経営情報など大学の諸活動に関する情報収集と蓄積や、学生の学習成果など教育機能についての調査分析などを行い、その分析結果の提供を通じて、大学の自己評価、意思決定に寄与する活動のことをいう。高校の学力観と大学の学力観は違う。高校についての感想を大学生から聞いたところ、次のようなことが高校の課題として浮かび上がった。①授業がつまらない、②先生が威圧的で高圧的だと感じた、③自主性が発揮できない、④トイレなども含めた学習環境が悪い、⑤校則の存在などがあった。

これまで注目されてきたのは「見える学力」としての「知識・技能」であった。しかし、これからは「コミュニケーション能力」などの「見えにくい学力」や、「見えない学力」と言われる関心・意欲・感性・自己肯定感などの「学びに向かう力」が社会で必要とされるようになる。生徒が必要とする学力は、知力+資質・能力である。就職試験で、大学の名前は関係しても、大学の成績は関係ない。社会で

## 注目される学力

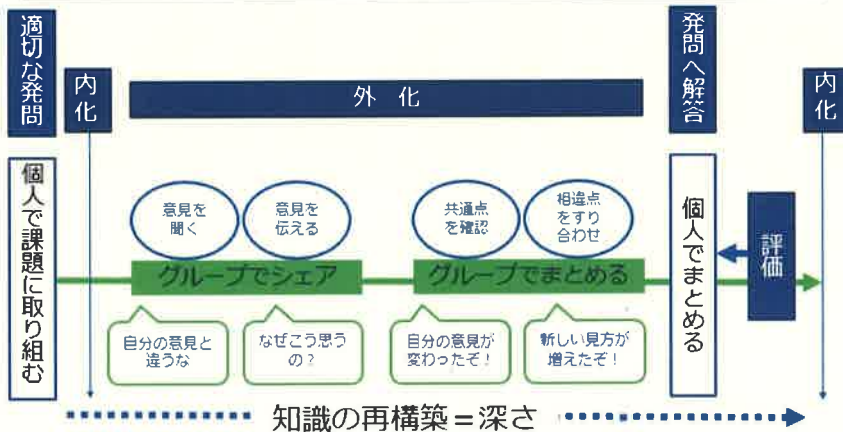


必要とされる力は別である。

まもなく Society 5.0と言われる超スマート社会が訪れる。今までは、部活動やイベント(学校行事)で「見えにくい学力」や「見えない学力」を育成した感がある。これからはそれを授業で育成していく必要がある。「見える学力」と合わせた、いわゆる学力の3要素すべてが、これからの社会では確実に必要となる。

関西大学

## 学習の流れ (事例)



ピアレビューをしていくことが授業改善には有効である。ピアレビューとは、仲間や同僚である「ピア」が、経験やノウハウを活用しながら、お互いの設備を診断・評価、すなわち「レビュー」しあう活動である。つまり、授業評価をみて、授業改善について話し合っていくことが重要である。

「見える学力」は身につけやすい。一方、「見えにくい学力」や「見えない学力」は身につけにくい。また、パーソナリティに左右する面もある。だからこそ、少しずつでも毎時間実践していくことで、3年間で身につくものである。

関西大学

社会は変化し、学習指導要領も変わる。一方で、学是や歴史、学校文化や地域の特性は変わらない。その両者から考えて、必要となる「見えにくい学力」や「見えない学力」を捉えていく。そこから、目標を定め、アクティブ・ラーニングなどの方法によって目標の達成を図り、できたかどうかを評価していく。これが教育のデザインである。田村氏によれば、カリキュラム・マネジメントとは、カリキュラム・マネジメントを主たる手段として学校の教育目標をよりよく達成していこうとする営みである。カリキュラムとは、教育計画だけを指すのではなく、毎年作成する教育課程、日々の授業、校内の組織、さらに生徒が学んだこを含めた概念としている。

学習の定着について、「発問→内化→外化→発問への解答」の流れが有効で、最後に個人でまとめたものを評価していく。最初の内化、つまりインプットで2割。次の外化でアウトプットしていくが、ここでアクティブ・ラーニングをおこなう。これが4割。成績が伸びるアクティブ・ラーニングとは、最後に教えることを重要視している。これが4割。学んでから教えることが大事である。予習先行型であれば、この流れがより強化できるので良いと思う。